付　記　日ポ辞書の「または語」Aの同義語の中には，次のごとき和語と漢語，または，音と訓の対立関係の認められる一群の語がある。

うしろみ。または，こうけん（後見）
おおもん。または，だいもん（大門）
かたつぶり。または，かぎゅう（蝸牛）
じせき。または，じいし（持石）
しち。または，ななつ（七）
すえざ。または，ばつざ（末座）
たびたび。または，どど（度々）
つくりやまい。または，さくびょう（作病）
つちだん。または，どだん（土壇）
まぐし。または，うまぐし（馬櫛）
まちじん。または，まちゅうど（町人）

この類も，広い意味では言葉の揺れと言えなくもない。甲陽軍鑑写本には上記中の「たびたび」と「どど」の両用のほかに，次の諸語が見える。

いくたび（幾度）いくど
いくとし（幾年）いくねん
いちど（一度）ひとたび
いちにん（一人）ひとり
いっしょ（一所）ひとところ
からくに（唐国）からこく
きじん（帰陣）かえじん
じゃくてき（弱敵）よわてき
そうそう（早々）はやばや
としどし（年々）ねんねん
やや（夜々）よよ
よこく（余国）よくに

しかもこれら一段化の諸例は，規範的な処理の手が加えられたと考えられる版本においては，その殆どが二段に正されてしまうのである。この間の状況についても，かつて述べたところであるが（注，「中世国語資料としての甲陽軍鑑」『文学』54-10），とにかく，話し言葉の世界においては一段化がかなり進んでおり，揺れていたことが推せられるのである。

七，まとめ

以上，戦国時代から織豊時代へかけての時期，すなわち，室町時代末，中世末期に当たる頃の日本語において，語形に揺れの見られるものを，主として日ポ辞書の所載語彙の中から抽出して見た。その総数は次のごとくであった。

	または語	両掲語	計
a，清濁の揺れ	90	79	169
（漢語	47	38	85）
（和語	43	41	84）
b，音の違いの揺れ	94	38	132
c，異形による揺れ	75	62	137
d，バ・マ行の揺れ	8	18	26
e，活用の揺れ	4		4
計	271	197	468

実に468語の多きに亙って揺れが見られることになる。更に甲陽軍鑑写本に見られるその他の例を加えると次のごとくである。

	日ポ辞書	甲陽軍鑑	計
a，清濁の揺れ	169	4	173
b，音の違いの揺れ	132	11	143
c，異形による揺れ	137	60	197
d，バ・マ行の揺れ	26	4	30
e，活用の揺れ	4	25	29
計	468	104	572

c及びeの甲陽軍鑑写本のそれには，方処的要素も加味して考えなければなるまいが，いずれにしても570に及ぶ諸語において揺れの見られるこの時期は，日本語の史的展開を考える上において注目すべき一時期である。この小論ではその資料整理の一助ともなることを願って，なるべく多くの語を挙げることに努めてみた。

よこすじかい（横筋違）よこすじかえ

よぶん（余分）ようぶん

訛形の中には，エ～イ，イ～ユ間の交替形が多いようである。前者が15例，後者が6例見える。また，他に例を見ない独自の語形も見えるようである。いずれも，この文献の特性を示すものと思われる。

六，活用の違いによる揺れ

日ポ辞書の「または語」には，活用の違いによるものが4見出し見られる。一段形動詞との併掲である。

あび，ぶる，または，びる。（浴）

おえ，または，おい，ゆる。（生）

ちび，びる，または，ぶる。（禿）

へ，ふる，または，へる。（経）

見出し以外にも一段化形は次のごとく現れている。

ぎょうずい（行水）。すなわち，ゆをあびる。

よくち（浴池）。ゆをあびるいけ。

へ，ふる（経）。ほどをへる。あんないをへる。

ねんげつ（年月）。ねんげつをへる。

ロドリゲスの『日本大文典』には，「関東で用ゐられ，又，都で一部の者に用ゐられてゐる」として，次の10語が例示されている。（注，『日本大文典』は1604年に前半が印刷され，1608年に後半が印刷されて刊行に到ったという。挙例は土井忠生博士訳注本による。）

くべる。上げる。求める。跳ねる。届ける。与える。経る。出でる。交ぜる。見せる。

甲陽軍鑑写本には，次のごとき諸例が見られる。

申あげる。廿年いきれば。理をへる（得る）。名をゑる。おきる。おぢる。おりる。心がける。かすめる。かろしめる。こたへる。見さだめる［めをむと訂］。すける（助ける）。そなゑる。そなへれば。たへる（絶える）。付ける。ふみつける。申つたへる。とりつめる。合戦をとげる。にげる。ぬける。はぢる。ほめる。まねる。よせる。

上一段動詞5語，下一段動詞19語を数えるのであるが，更に次のごとき助動詞にまで及ぶ。

大軍に土手をつかせる事

料人也」]

さく（柵）しやく

しぞこない（仕損）しそこなへ

しっかい（悉皆）しつかへ

じょうもう（焼亡）じやうも［かたこと「焼亡を　○じよもん○じよも」]

しろてぬぐい（白手拭）しろてのぐい

じんあい（塵埃）ぢんなへ

じんめ（神馬）じんめい

すくやか（健）すこやか

そうがまえ（総構）そうがまい

たいりゃく（大略）たいらく［かたこと「大略を　○たいらく」]

たち（館）たて。

いだち（居館）いだて

たとい（縦）たとへ

つがい（番）つがへ

てのごい（手拭）てぬぐい［かたこと「手拭を　○てぬごひはわろし　手巾とも書也　たなごひとはいふ」浮世鏡「てぬぐひ　手巾　手拭」]

のりとり，る（乗取）のっとり，る

ひとかい（一抱）ひとかえ

ふまえどころ（踏まへ所）ふまいどころ

へみ（逸見）へんみ

ほうぐ（反古）ほぐ

ほうこう（法興）ほっこう和尚

むくろ（躰）もくろ［かたこと「死骸を　○もくろはわろし○むくろとはいふべし」]

むさぼり，る（貪）むさぶり、る

もだえこがれ（悶焦）もだひこがれ

もったいなし（勿体無）もつたへなし

もめん（木綿）もんめん［かたこと「木綿を　○もんめん」浮世鏡「もんめん　木綿　もめん」]

ゆいごん（遺言）ゆいげん・いいげん

ゆうめん（宥免）ゆうめい

あっこう（悪口）あくこう
いいずて（言捨て）ゆいずて
いにょう（囲繞）いにう
いやしむ（卑）やしむ
いわい（祝）ゆわい
いわつき（岩付）ゆわつき
いわどの（岩殿）ゆわどの
いわれ（謂）ゆわれ
いわんや（況）ゆわんや
うちおとす（打落）ぶちおとす
うちがい（打飼）うちがえ
うちがいぶくろ（打飼袋）うちがえぶくろ
うばいとる（奪取る）ばいとる
うま（馬）むま
うまれ（生）むまれ
えびす（恵比須）えべす［かたこと「夷（えびす）を　○えべす」浮世鏡「○ゑべす　川通　夷（えびす）川通也」］
えんいん（延引）えんにん
えんぶだごん（閻浮檀金）えんぶだんごん
おおうち（大内）おおち
おさえ（押）おさい
かいおおい（貝覆）かいおい
かいがいしい。かいがしい。
かいぞえ（介添）かひぞひ
かっせん（合戦）かせん
がってん（合点）がてん
かんよう（肝要）かんにやう
きこえ（聞え）きけい
きのくに（紀伊国）きいのくに［かたこと「紀伊国（きのくに）を　○きいのくになどゝよまず」］
こうりょく（合力）かうりやく
こしらへ（拵）こしらい
ごりょうにんさま（御料人様）ごりやうにさま［浮世鏡「御（ご）れうに　御（ご）

と』や『浮世鏡』には次のごとき例も見える。

樒(しきみ)を　○しきび

しのべ竹　百葉(しのめ)竹　長間(同)竹

蟬(せみ)を　○せび

つめたきといふべきを　○つべたい○つんめたいなどいふハよろしからぬにや。…

富小路(とみのこうじ)を　○とびのこうじハくるしかるまじけれど…

灯火(ともしび)を　○とぼし火

ねむたきを　○ねぶたひ

なおここで，ちなみに，甲陽軍鑑写本に見られる既述以外の揺れ語を示すと，次のごとくである。

清濁（左は日ポ辞書，右は甲陽軍鑑写本）

きりとり（切取り）きりどり

しんたい（身体）しんだい

せんこく（戦国）せんごく

べんさい（弁才）べんざい

音の違い

おしょう（和尚）かしょう［かたこと「和尚(おしやう)を，くはしやうとは聖道(しやうだう)の言葉にて，おしやうとは禅家(ぜんけ)にのみいふと聞(きゝ)しかども，ある僧(そう)の云るは，浄家(じやうけ)にもおしやうといふ名目(みやうもく)の侍ると云り…」浮世鏡「…但和尚は禅宗(ぜんしう)にていふ詞也。和尚(くはしやう)といふがよしと或博識(ものしり)のいへり。天台家(てんだいけ)にて慈鎮和尚(じちんくはしやう)などとなへきたれり」］

かぼく（和睦）わぼく

けんがく（懸隔）けんきゃく

こうきょう（剛強）ごうきょう

しょくぶつ（食物）しょくもつ

たんじゃく（短冊）たんざく

にんばち（人罰）にんばつ

ひょうそつ（兵卒）へいそつ

ぶせんさく（無穿鑿）むせんさく

みょうばつ（冥罰）みょうばち

ゆいごん（遺言）ゆいげん

転訛・異表記

バ行を現す仮名「ばびぶべぼ」で書かれるということであろうが，濁点を付することを必ずしも要しなかった当時の書記習慣にあっては，即ち「はひふへほ」で表記されることであった。「うそふく」「かたふく」と書いて「うそむく」「かたむく」と読まれる類のことが，かなり広く行われたことについては，伝統的な謡本等の実際の用例や仮名遣書等の記事を挙げて，かつて論じたところである。（注，「中近世における一種の仮名遣について」『語文』60・61・62。『甲陽軍鑑大成』第4巻，研究篇付章に再録。）

『かたこと』にも，例えば「弔ふ」について次のごとく記す。

人のいたみを弔（とふら）ふを，とぶらふといふハよろしからじと云り。とむらふといふやうにいふべし。仮名（かんな）にハとふらふとかくなり。…

蝙蝠（かうふり）を　○かうむり○かうもりといふやうによむべし。

しかしながら，現実には揺れていたらしく，近年刊行された『日葡辞書提要』（森田武著・清文堂）にも，「バ・マ行音の交替とその表記」と標目して論究されているところである。

比較的に濁点をよく付する甲陽軍鑑写本においても，次の諸語について両様が見られる。（甲陽軍鑑写本は，土井忠生博士蔵・三井家旧蔵本による。甲陽軍鑑の礎稿が，編著者高坂弾正死去の天正6年（1578年）以前，すなわち，日ポ辞書に少しく先立つ時期に成ったと考えられることについては，かつて論じたところである。）（注，「中世国語資料としての甲陽軍鑑」『文学』54-10。『甲陽軍鑑大成』第4巻，研究篇第6章に再録。）

えらび，ぶ。えらみ，む。

かたぶけ。かたむけ。

せばい。せまい。

ちょうそがべ（長曽我部）ちょうそがめ。

つぶり。つむり（頭）

とびなが（富永）とみなが。

とぶらい。とむらい。

ひぼ。ひも。

まぼり，る。まもり，る。

ほかに，単例で現れる「かたふけ」〔傾け〕「たハふれ」（戯れ）・「そふく」（背く）や「さふらい大将」等の「ふ」表記は，「む」とよむべきそれであろう。15例中5例の「けふり」も同趣と思われる。上記のうち「長曽我部」と「富永」以外は日ポ辞書にも載せるが，「せまい」「つむり」は見えない。『かたこ

シタヒボ。または，シタヒモ。

シラクボ。または，シラクモ。

シラベ，ブル。または，シラメ，ムル。

トムライ。または，トブライ。

マレバレ。または，マレマレ。

ほかに，両掲語として，次の18語が見られる。

ウソムキ，ク，イタ。ウソブキ，ク，イタと書かれる。

ウツブキ。ウツムキ。

エラビ，ブ。エラミ，ム。

エラビダシ，ス。エラミダシ，ス。エラミイダシ，ス。

カタブケ，ル。カタムケ，ルの条を見よ。

サブライ。サムライ。

シワミ，ム。すなわち，シワビ，ブル。

タカヒボ。タカヒモ。

タワムレ。タワブレ　の条を見よ。

タワムレ，ルル。タワブレ，ルルの条を見よ。

ツルビ，ブ。または，ツルミ，ムとも言い，その方がまさる。

トモシイ。トボシイ　に同じ。

ネブリ，ル。ネムリ，ル（舐り，る）と言う方がまさる。

ビシャゴ，ミサゴ（雎鳩）と言う方がまさる。

ヒボ。ヒモ。

ブチ。ムチ（鞭）。[かたこと「馬（むま）の鞭（むち）を　○ぶちハわろしと云り　鷹猿（たかさる）の時にハ○ぶちといふとぞ」]

マブシ。または，マムシ（蝮）とも言い，その方がまさる。[かたこと「蛇（へび）の蝮（まむし）を　○まぶし」]

マボリ，ル。マモリ，ル。

日ポ辞書においては，以上26語について，バ・マ行間の揺れが見られるわけであるが，「うそむき，く，いた」の項において「うそぶき，く，いたと書かれる」と言うごとく，これらは表記の問題でもある。「かたぶけ，る」の項においては更に次のごとく説く。

なぜなら，B字を用いて〔Catabuqe, ru と〕書かれるけれども，話し言葉ではMを以て〔Catamuqe, ru と〕発音されるからである。

「B字を用いて書かれる」ということは，「かたぶく」「うそぶく」のごとく，

づくよとハいふ」]

ユゼイ。ユンゼイ（弓勢）

ユブクロ。ユミブクロ（弓袋）

ヨカウ。または，ヨカワ（夜川）とも言い，むしろその方がまさる。

ワタボウシ。ワタボシ（綿帽子）

ワラウ。ワラウベ（童）[浮世鏡「わろ　わろう　童子也」]

ワロウ。ワルイ（悪い）に同じ。

以上，「または語」75語，両掲語62語，合計137語（看病は両出）の多きに亙って，日ポ辞書において異形語による揺れが見られるということになる。うち，『かたこと』に載せるもの42語，『浮世鏡』に載せるもの14語を数え得る。

片言直しに関する記事としては，甲陽軍鑑末書下巻之上に見えるものが最も初期に属しよう。武士の子弟教育に関わる条章である。

地下人のまねを仕リ，御公家のさいしやう殿をば，さんしやう殿と申候。くわんばく殿をば，かんばく殿と申候。民部をバ，にんぶと申候。人のみやくをバ，にやくと申候。きやく人をバちやく人と申候。留すをバ，ゆすと申候。余所より使のきたるに，名もろくに申さず候。かいるをバ，がいると申候。とんぼをバ，どんぼと申候。わづらひのくわくらんをば，はくらんと申候。是ハ三百貫より下の，歩のかせものまでの事。（22ウ）

「はくらん」が日ポ辞書や『かたこと』にも見えることは前述の通りであるが，「さんしやう殿」は『きのふはけふの物語』や『醒睡笑』の「とうさんしやう」に，また「かんばく殿・にんぶ・にやく・がいる」の諸語は『浮世鏡』にも見える。なお，『武者物語』は甲陽軍鑑のこの部分を承けているようである。いずれにしても，室町末から江戸初期にかけてのこの時期，異形語による揺れが相当に幅広く行われていたことを知るのである。

五，バ・マ行間の揺れ

バ行音とマ行音の間において揺れの見られるのは，日本語において由緒の古いことであるが，日ポ辞書の「または語」としては次の8見出しに見られる。

ウカビ，ブ。または，ウカミ，ム。

ウカベ，ブル。または，ウカメ，ムル。

ヲシウカベ，ブル。または，ヲシウカメ，ムル。

ナノメナラズ。ナナメニ（斜め）[かたこと「斜(なのめ)といふこと葉ハ，七八分なといふ心にて侍るとかや。然れバ大かたならずといへる心にて侍る。なゝめといふも同しこと葉なり。…」]

ヌカコ。ムカゴ。[かたこと「零余子(ぬかご)を　○むかご」]

ハクラン。ただし，正しい本来の語はクヮクラン（霍乱）である。[かたこと「霍乱(くはくらん)を　○はくらん」]

フウキ。フッキ（富貴）

フクロビ。ホコロビ（綻び）と言う方がまさる。

ブツヤキ，ク。または，ツブヤク（呟く）とも言い，むしろその方がまさる。

ブツヤキゴト。または，つぶやきごと（呟言）とも言い，むしろその方がまさる。

ヘコキムシ。ヘヒリムシ。[浮世鏡「へこきむし　気鬱　へひりむし」]

ヘンガエ。ヘンガイ（変改）と言う方がまさる。[かたこと「変改(へんがい)を　○へんがへ」]

ヘンテツ。ヘントツ（褊褊）[かたこと「褊褊(へんとつ)を　○へんてつ。但五音通(つうず)れバ苦しからぬ歟。…」]

ホウグ。ホンゴ（反古）と書かれるけれども，ホウグと発音される。[かたこと「反古(ほうご)を　○ほんぐハいかゝ。ほことハいふ」]

ホゾン。ホンゾン（本尊）

マイゲ。または，マユゲ（眉毛）とも言い，むしろその方がまさる。

マドコロ。マンドコロ（政所）[浮世鏡「田舎(いなか)の民庄(たみしやう)や年寄めきたる者(もの)をまどころといふは　政所(まんどころ)也」]

マラウト。マレビト（客人）に同じ。

ミッカン。ミカン（蜜柑）

モエギ。ウスモヨギ。[かたこと「萌黄(もよぎ)を　○もえぎ」]

モトイ。モトユイ（元結）と言う方がまさる。[浮世鏡「もとひ　もつてん　髻(もとゆひ)也」]

ヤクイン（薬院）…ただし，本来の語はセヤクイン（施薬院）である。[かたこと「施薬院(やくゐん)を　○せやくゐん」]

ユウガヲ（夕顔）。省略してユウガウと言う。しかし本来の語はユウガヲである。[浮世鏡「ゆふがう　夕顔　ゆふがほ」]

ユウヅクヨ。ユウヅキヨ。[かたこと「夕月夜(ゆふづきよ)を　宵(よひ)月夜ハいかゞ。ゆふ

といふやうによむべし」]

ケラツツキ。本来の正しい語は，テラツツキである。[かたこと「啄木鳥を　○けらつゝき。…」]

キダハシ。キザハシ（階）[かたこと「階を　○きだはしといふはくるしかるまじき歟。…」]

キリモノ。キルモノ。[かたこと「外家の衣類を　○きものといふべきを，きりものといふこと然るべからず。きる物とハいふべき歟」浮世鏡「きり物　衣　服」]

クッキャウ。または，クキャウ（究竟）とも言い，むしろその方がまさる。

コツジキ。コジキ（乞食）

コトイ。コットイ（特牛）[かたこと「特牛といふを　○こつていうじハ如何。こつといとハいふ歟。…」浮世鏡「こていうじ　特牛　こと い…」]

ササギ。ササゲ。[浮世鏡「さゝぎ　小角豆　さゝげ」]

シシュ。シイシュ（旨趣）の条を見よ。

シチネン。シツネン（失念）[かたこと「失念を　○しちねん」]

ジャレ。ザレ（戯れ）と言う方がまさる。（ジャルル，ジャレコト，ジャレグイ，ジャレグルイ，ジャレモノも同趣。）[かたこと「左礼を　○じやれハわろしと云り」]

シャウジ。シャウジン（精進）[かたこと「精進といふべきを　○しやうじといふハくるしからずと云り。…」

シンボッイ。文書語。シンボチ（新発意）に同じ。[かたこと「新発意を　○しんぼちいわろし。しぼちと源氏にハあり」]

ザウリ。一般にはジャウリ（草履）と言う。[かたこと「草履を　○じやうりハいやしきといふ人あれども少もくるしからず。…」

ダキ，ク。イダキ，ク（抱き，く）と言う方がまさる。

タンナ。または，タヅナ（手綱）とも言い，むしろその方がまさる。[かたこと「手綱を　○たんな」]

タンネ，ヌル。または，タヅネ，ヌルとも言い，むしろその方がまさる。[かたこと「尋ねよを　○たんねよ」]

トウジミ。トウシン（灯心）[かたこと「灯心を　○とうしん　とうずミなどハわろし。…」浮世鏡「とうしん　灯心　とうしみ」]

ナゼニ。ナジョニ。[かたこと「なぜにを　○なじよに」]

ヨナガリ。または，ヨナガレ。

ヨナベ。または，ヲナベ。

ヨヒトイ。または，ヨッピトイ。[かたこと「夜(よ)一よといふべきを　○よつぴとい」浮世鏡「常住(ぢやうじう)といふ事をよつぴとひ，よつびとといふはいか成事にや」]

ワゲモノ。または，マゲモノ。[浮世鏡「わげもの　捲　マゲモノ」]

ワラズ。または，ワラジ。

ワラベ。または，ワランベ。

以上，75 見出し，和語が多く 86.7% を占める。音便に関するものが 11，比較的多く見られる。

両掲語としては，次の 62 語を見いでた。

アナヅリ，ル。アナドル（侮る）と言う方がまさる。

アユミ，ム。アヨミ，ム（歩む）

アリキ，ク。アルキ，ク（歩く）[かたこと「道(みち)をありくといふべきを，あるくといふハ五音通してもよろしからぬ歟」]

イルリ。イロリ。ユルリ。[かたこと「囲爐裏(いろり)を　○ゆるりはわろし。又いるりとはいふべし。仮名遣(かなづか)ひの書にいるりとあり」]

イロコ。ウロコ（鱗）

ウンドン。ただし，ウドンと発音される。[かたこと「温飩(うどん)を　○うんどんといふもゆき過てわろしとかや」]

ヲトウト。ヲトヲト。ヲトト（弟）[浮世鏡「おとうと　弟(おとゝ)なり」

ヲンアイ。ただし，ヲンナイ（恩愛）と発音される。

カエル。ただし，話し言葉ではカイルと言う。[かたこと「蝦(かへる)を　○かいる○がへる」浮世鏡「がいる　蝦蟆　かいる」]

カシシ。カノシシ（鹿のしし）と言う方がまさる。

カズエ，ユル。カゾエ，ユル（数ゆる）

カドデ。カドイデ（門出で）が本来の言い方で，一般に用いられる。

カビャウ。本来の正しい語はカンビャウ（看病）であるけれども，話し言葉ではカビャウという形もまた通用している。

カブ。カブラ（蕪）と言う方がまさる。

カヤシ，ス。カエシ，ス（返す）

カロイ。カルイ（軽い）

カワホリ。カウムリ（蝙蝠）[かたこと「蝙蝠(かうふり)を　○かうむり○かうもり

タケザヲ。または，タカザヲ（竹棹）
タチウヲ。または，タチイヲ（太刀魚）
タツニ。または，タテニ（縦に）
タトエバ。または，タトワバ。
タベエイ。または，タベヨイ，ヨウ（食べ酔ふ）
タワ。または，タヲ。
ツイエ，ユル。または，ツエ，ユル（費）
ツイヤシ，ス。または，ツヤシ，ス（費）
ツゴモリ。または，ツモゴリ。[かたこと「晦（つごもり）といふべきを　○つもごりといふはわろし」]
ツミ。または，ツム（錘）
テイタク。または，テイタウ（手痛う）
テテ。または，チチ（父）
トウトウ。または，トクトク（疾く疾く）
トサカ。または，トッサカ（鶏冠）
トサカノリ。または，トッサカノリ。
トビイヲ。または，トビウヲ。[浮世鏡「とびいほ　鯨　とびを」]
トリワケ。または，トリワキ。[かたこと「…そのとりわきを，とりわけといふは如何。又野分のかぜを，のわけといふもあしかるべし」]
トロケ，または，トラケ，クル。
ハハ，または，ハワ（母）
ハハチョウ。または，ハワチョウ。
ヒキカカリ，ル。または，ヒッカカリ，ル。
フキン。または，フイキン。
フク。または，フクタウ。[かたこと「河豚（ふくとう）を　○ふぐ」]
ホドナウ。または，ホドナク。
ムンズト。または，ムズト。
モロウ。または，モロク（脆く）
ヤイバ。または，ヤキバ。
ヤマメ。または，ヤモメ。[かたこと「鰻（ヲトコヤモメ）　寡（ヲンナヤモメ）を　○やまめ但不苦とも云り」]
ヨコイ。またはむしろ，イコイ，ウ（憩）
ヨッポド。または，ヨキホド。

それをおひんなれとはいかゞ」]

カイ。または，カユウ（粥）[かたこと「粥(かゆ)を　○かいといふもよしと云り」]

カイアワビ。または，カイワウビ。

カマイテ。または，カマエテ。[かたこと「構而(かまへて)を　○かんまいて○かんまへて」]

カンコドリ。または，カムポドリ。

カンベャウ。または，カベャウ（看病）

キビス。または，クビス。[かたこと「踵(くびす)を　○きびす」]

クノギ。または，クヌギ。[かたこと「樟(くぬぎ)を　○くのぎ」浮世鏡「くのぎ　欅　くぬぎ」]

ケジャウ。または，ケンジャウ（勧賞）

ケンビイシ。または，ケイビイシ（検非違使）

カウヨリ。または，カミヨリ（紙縒）

コソバイ。または，コソバイイ。

コニダ。または，コンダ（小荷駄）

ザッシ。または，ザシ（雑誌）

ザヒツ。または，ザッピツ（雑筆）

サリゲナウ。または，サリゲナク。

シイタウ。または，シダウ（至道）

シイホウ。または，シハウ（至宝）

シゲク。または，シゲウ（繁う）

ジャクロ。または，ザクロ。[かたこと「柘榴(じやくろ)を　○ざくろ」]

ジュコン。または，ジュッコン（入魂）

シュセン。または，シュッセン（衆銭）

シラヂ。または，シロヂ（白地）

スギハラ。または，スイバラ（杉原）[かたこと「杉(すき)原の紙(かみ)を　○すいばら」]

スゲ。または，スガ（菅）

サウナウ。または，サウナク（左右無）

ソト。または，ソット。

タカナワ。または，タケナワ（竹縄）

タケガワラ。または，タカガワラ（竹瓦）

改稿：中世末の言葉の揺れ

酒　井　憲　二

前号に掲げた拙稿の第四節以降を，次下のごとく改稿する。

四，語形の違いによる揺れ

日ポ辞書の「または語」のうち，7.7％を占めるFは，転訛その他によって語形が変化したと認められるものを指す。いわば「異形語」である。「あゆ(鮎)」に対する「あい」，「うお（魚)」に対する「いお」，「つごもり」に対する「つもごり」などであるが，音便などもここに含めた。また，字音語では「看病」の「かびょう」，「検非違使」の「けいびいし」，「至宝」の「しいほう」など，名目読み，いわゆる読みくせに類するものなどである。連声によるものもここに収めた。

日ポ辞書の「または語」としては，次の75語を数え得る。なお参考の為に，安原貞室の『かたこと』（慶安3年1650刊）及び『浮世鏡』第三（貞享5年1688刊）に見える関連記事を付記する。

アイ。または，アユ（鮎）［かたこと「鮎（あい）を　あゆ」］

アラユル。または，アラウル。

アワビ。または，ワウビ。

アンノン。または，アンヲン（安穏）

イヲ。または，ウヲ（魚）［かたこと「魚（いを）　仮名（かんな）にうをと書（かき）ていをとよむべし」］

イギ（居木)。または，ユギ。

イキダワシイ。または，イキダウシイ。

ウンノミ。または，ウノミ。

ワウワクナ。または，ワウチャクナ。［かたこと「枉惑（ゆうわく）を　○わうちやくとはいかゞ」］

ヲッサゲ，グル。または，ヲイサゲ，グル。

ヲヒン。または，ヲヒル。［かたこと「…おひなれはお昼（ひる）なれといふ心歟。